



Kobe Shoin Women's University Repository

KARASHI-DANE

幼児期の二言語使用が認知と脳にもたらす影響の解明

研究代表者	久津木 文
研究代表者別名	KUTSUKI Aya
報告年度	2020-06-15
研究課題番号	15K01784
URL	http://id.nii.ac.jp/1044/00002191/

令和 2 年 6 月 15 日現在

機関番号：34513

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2019

課題番号：15K01784

研究課題名（和文）幼児期の二言語使用が認知と脳にもたらす影響の解明

研究課題名（英文）The effects of bilingual language use in early childhood on development of the brain and cognition

研究代表者

久津木 文（Kutsuki, Aya）

神戸松蔭女子学院大学・人間科学部・教授

研究者番号：90581231

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,700,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は幼児期の二言語獲得が認知機能の発達と社会的認知の指標である心の理論の発達に与える影響を検討することであった。また同時にこれらの側面の発達に寄与する神経学的基盤についての検討も行った。主にモノリンガルとバイリンガルの幼児を対象に、認知機能ならびに社会的認知を測定する複数の行動課題を実施した。一連の研究から、二言語同時獲得では二言語間で知識が共有され処理されることによる獲得への影響があることが示され、二言語の存在により、一言語とは異なる認知的過程が存在する可能性が確認されたといえる。また、バイリンガルが行う言語切り替えが実行機能系と関連する可能性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

国内において外国人の親をもつ子どもや日本語以外の言語を家庭で聞いて育つ子どもは増加の一途をたどる。欧米では移民の子どもを対象とした二言語もしくは複数言語発達の認知的影響が長く研究されているが、日本語を含む二言語・複数言語獲得が認知におよぼす影響についてはほとんど調べられてきていない。本研究は日本語を含む二言語獲得の幼児を対象に科学的手法で認知特性と二言語使用との関連を検証しようとした数少ないものであり、多様化し続ける日本の子ども育つ環境の影響を理解し支援するために資料となりうると考えられ、学術的にも社会的にも意味がある。

研究成果の概要（英文）：The main aim of the current project was to examine the possible effects of bilingual language acquisition on cognition and social cognition in young children. It also aimed to examine the neurological bases that support such aspects of cognition. We examined the cognitive and social cognitive abilities of both bilingual and monolingual preschoolers using a number of behavioral measures. The results of series of studies suggest two things: firstly, sharing of knowledge of two languages in simultaneous acquisition influences the language acquisition itself, demonstrating different cognitive processes involved in bilingual language acquisition; and secondly, possibility that language switching behavior by bilinguals is related to executive function.

研究分野：発達心理学

キーワード：バイリンガル 幼児 実行機能 心の理論 社会性

様式 C - 19, F - 19 - 1, Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

バイリンガルの子どもの学力を含む様々な能力はモノリンガルのものとは劣るとされてきた時代があった。このような考えは主流文化・言語のなかに入り込んできた移民・少数民族の文化・言語を良く思わない時代的風潮のなかで行われた研究によって支持されていたが、家庭の経済・教育レベルを統制しないまま不公平な比較が行われていたことがその後指摘されるようになった。

これとは逆に、最近ではバイリンガルの子どもの認知的な優位性が注目されはじめている。特に認知のなかでも“実行機能”の違いが注目されている。実行機能とは目的遂行のために必要な能力であり、ある行動を実行する際、無関係であったり適切ではない行動や情報を抑制する高次の認知的抑制制御(Zelazo, 1997)と定義されている。このなかには、“抑制”、“認知的柔軟性”、そして“情報の更新”といった下位機能が含まれ(Miyake, Freidman, Emerson, Witzki, Howerter & Wager, 2000)、幼児期の間に飛躍的に発達し、後の学力や社会性との関係があるとされている。Bialystok et al.(1998)等を皮切りに、バイリンガルの幼児はモノリンガルよりもこのような実行機能系が関わる課題が得意であることが様々な研究で示されている。つまりは、二言語を聞いて育つ子どもは同時に活性化される二言語の情報を保持しながらも場面に応じて不必要な言語の情報を抑制し、切り替えて柔軟に使い分ける必要性に頻繁に晒されることから、実行機能系の能力がモノリンガルと比較して高いとされている。しかし、日本語を含む多言語環境で育つ子どもは国内外問わず増加しているものの、その認知に及ぼす影響は殆ど検討されてきていない。近年の早期外国語教育に対する興味の高さ、在外日本人家庭の増加や国内における外国語使用家庭の増加の観点からも、日本語を含む幼児期のバイリンガリズムの認知的側面についての研究は社会的な要請が高いものの、日本語を含むバイリンガルの言語発達とその認知発達への影響について実証的な検討は未だ乏しい。

2. 研究の目的

子どものバイリンガルは常に二言語の情報を巧みに制御し場面に応じた使い分けを行う経験をして生きていることから認知的柔軟性や葛藤抑制のような実行機能の能力や、他の認知機能が促進されていると考えられている。同様に二言語使用によって促進された認知機能は幼児期初期の他者理解の物差しである他者理解(心の理論)の能力をも促進すると解釈されている。しかしながら、実際にどのような二言語使用や状態がこれらの能力を促進するかについてのエビデンスは殆どない。さらに日本語を含んだ幼児バイリンガルの認知的側面は実証的に検討されてきていない。

本研究の目的は幼児期の二言語獲得が認知機能の発達と社会性発達の指標である心の理論の発達に与える影響を検討することであった。また同時にこれらの側面の発達に寄与する神経学的基盤についての検討を行うことも目的とした。

3. 研究の方法

(1) 行動課題の作成と定義と手法の開発

幼児に合わせた行動課題を作成するために、主にモノリンガルの子どもの対象とした予備実験を行った。複数回行っているため、全てについて記載

はできないが、概ね以下のような対象と手法を用いた。対象：幼児3歳～6歳。実施場所：保育園・幼稚園の静かな場所で実験者と対面で実施。実施課題：語彙発達検査，ストループ課題，抑制制御課題，心の理論課題等。ストループ課題と抑制制御課題はPCを用いて反応時間と正誤を計測した。語彙検査以外の行動課題の実施の際にはpocket-NIRSを装着し，前頭前額部(Fp1とFp2)の脳活動計測を行った。また，pocket-NIRS自体はコンパクトで幼児実験に向いているものであるものの，計測できる範囲の狭さや機能が限定的であることから，その信頼性の確認が必要であった。そのため，同一課題実施時の大型のfNIRSや他の小型の脳計測機器と近いデータが得られるかの確認を行った。

(2) 二言語使用の認知的影響

言語獲得における影響

二言語の同時獲得における言語内での認知的影響について二つの領域について検討した。一つ目は語彙獲得について，二つ目は語順の獲得についてのものであった。

二言語の語彙獲得については，マッカーサー乳幼児言語発達質問紙(CDIs)の英語版ならびに日本語版を用いて乳児～幼児の語彙データを収集したものを使用した。語順の獲得についてはスペイン語と日本語の二言語環境で育つ幼児を対象に，名詞句内の語順の獲得について複合名詞課題を実施した。

実行機能，心の理論，脳への影響

モノリンガルならびにバイリンガルの幼児を対象に複数の実験実施を行った。実験によって多少異なるものの，一つの実験で2～6歳の幼児20～40名を対象に(1)に示したような課題を実施した。

4. 研究成果

(1) 行動課題の作成と定義と手法の開発

本課題では複数の行動課題を使用して幼児の認知や社会的認知を計測することから，行動課題の開発とその有効性の検討を行った。予備研究としてモノリンガルの幼児を対象として課題の検討を行った結果を論文としてまとめた(久津木,2016)。また脳血流の計測に使用するpocketNIRSの信頼性を担保するため，fNIRSや他の脳計測機器で収集したデータと相関的検討を行った結果ある程度近いデータが得られることが示された(田浦,2016等)。

(2) 二言語使用の認知的影響

言語獲得における影響

二言語を獲得することによる認知的影響を明らかにするためにバイリンガル幼児の語彙や文法の獲得に注目しその特徴をモノリンガルと比較することにより検討した。その結果，バイリンガルが獲得する語彙にはモノリンガルとは異なる独特な傾向をもつということだけでなく，モノリンガルとは異なる過程を踏んで語彙を獲得することを示唆する結果を得た。久津木(2017)では，日本語と英語を聞いて育つ一人の幼児の語彙カテゴリーの発達と入力の関係の検討を試み，入力場面の共有性の非常に高い，家庭内の事物等についての語彙は言語間で相関があったが，その他の語彙ではほとんど相関がみられなかった。特に，月齢間の分析の結果では二つの言語の産出・理解語彙において特徴的な語

彙に共通性がみられなかった。このことから、言語類型的に類似性の低い言語間では入力場面の共通性が非常に高い語彙カテゴリでは知識の共有がみられるが、それ以外では、二つの言語のレベルの差の影響から二言語の語彙カテゴリは概ね独立して発達することが示唆された。同様の傾向は、三つの言語を獲得する幼児にもみられ、ドイツ語、日本語、英語の三言語を同時獲得する幼児の14か月間の語彙の変化を分析した結果、三言語の獲得語彙のカテゴリやレベルには違いがあることがあるものの、言語間で知識の共有がありそれが発達的に変化することが示された(Kutsuki, 2016)さらに詳しく獲得語彙を個別に検討したところ、幼児の語彙獲得においても、語彙レベルで類似性の言語間で高いものは類似性が低いものとは異なる処理をされている可能性が示唆された。幼児のバイリンガルの語彙獲得において言語間で形式の類似性の影響があるかを検討したもの。日本語語彙において英語派生の形式的類似性の高いカタカナ語がその他の対応語と比べ獲得率が高いかを調べた。その結果、その他の対応語と比較し、全般的に形式的類似性が高い語彙は獲得率が高いことが判明した(Kutsuki, 2018 & 久津木, 2018)。またこのような傾向はモノリンガルの語彙ではみられなかったことから、幼児期の同時バイリンガルの語彙獲得において形式的類似性は言語をまたいで影響を及ぼすことが確認されたといえる。

実行機能系、心の理論、脳への影響

バイリンガルの実行機能系が促進されているといわれるものの、言語を切り替える行動自体の影響であるかを確かめた研究はほとんど存在しない。しかし、かなり易しい語彙を設定したとしても、幼児のバイリンガルの2言語の能力には非常に大きな差と個人差も大きく、課題実施が困難である。よって、言語能力の影響を受けない、一言語内での言語的切り替え課題を開発し、他の実行機能系の指標と照らし合わせることで、課題の有効性を確認する実験を実施した。

まず、幼児期の一言語話者を対象に、言語的切り替え課題を開発しその結果と他の実行機能系の行動指標や質問紙による抑制や衝動制御の傾向との関連を検討した(久津木, 2017, & Kutsuki, 2017)。その結果、語彙切り替え課題の指標のなかでも、正しく素早く反応できるかを示す値と気質の下位項目のなかでも注意の転移との間に有意な負の相関がみられた。このことから、人物によって音節を変えて素早く反応を返せる子どもは普段の生活のなかでも場面に応じて注意や行動を切り替えることが得意であることが示された。しかし、他の下位項目とは関連がみられなかった。これはバイリンガルの幼児がモノリンガルの幼児とで実行機能系の課題の成績を比較した際、プレゼントを待つ課題や目を閉じて開かないよう我慢するといった衝動制御系の課題では差がないのに対し、注意の切り替えやワーキングメモリ、そして、葛藤抑制系の課題ではバイリンガルのほうが優勢であったことを示す Carlson & Meltzoff(2008)の結果と類似性がある結果であった。またこれは、言語的切り替え能力は実行機能系の特定の領域と関連する可能性を示唆するものであった。

久津木&田浦(2018)では、バイリンガル幼児の実行機能系課題と言語能力との関連性を比較した。その結果、語彙数を指標とした英語力と日本語力と実行機能との関連を比較したところ、英語力のみが特に葛藤抑制と関連を示し、さ

らに、英語力が他者理解の指標である心の理論と関連があることが示された。このことから、早期から英語を学ぶという経験が、幼児期の認知の実行機能そして社会性発達の双方に影響を与えている可能性があることが確認された。しかしながら、想定していた実行機能と心の理論との直接的な関連はなかったことから、英語獲得の影響は異なるルートを経ている可能性が考えられる。例えば、幼児期から外国語である英語の語彙が多い子どもは多重ラベルを許容できる認知的な柔軟性がもともと高い、もしくは、このような経験により促進されていると解釈できる。また、心の理論のような他者理解の能力は、英語を学ぶ際の異文化接触により育まれていると解釈することができる。また、この結果にさらに考察を加えたものを論文として報告した(久津木・田浦, 2019)。

モノリンガルの幼児対象の実験(Kutsuki, 2017)では、上記の実験遂行時の脳活動と言語の切り替え行動と実行機能系の複数の指標との関連を検討した。具体的には下記のような結果が得られた。語彙切り替え課題において、正答の反応時間と正答数は心の理論課題のスコアと関連があることが明らかになり、素早く正確に言語音を切り替える能力は心の理論課題の通過に必要な表象の切り替えや抑制と関連することが示唆された。さらに、年齢別(5歳以下 vs 5歳以上)で分析を行った結果、年齢によって課題間の関連性が異なることが示された。5歳以下では、抑制能力(質問紙)と語彙課題の正答数及び反応時間、そして、注意の切り替え(質問紙)と語彙切り替えの反応時間とが負の相関を示した。

このことから、5歳以下の幼児では、日常的な行動のなかで衝動性の抑制や他の行動に気持ちや注意を切り替えるといった能力が、言語音を正確に速く切り替える能力と関連していることが明らかとなった。5歳以上では、切り替え課題が気質指標との間で関連がみられなかった。しかし、左前頭全皮質の活動と負の相関が認められた。このことから、年長の幼児において言語的な抑制には脳の特定の部位が関連しており、このような抑制において個人差がみられ、得意であるほど活動が低いことが示唆された。なぜ年齢によって結果が異なるのかについて具体的な答えはまだないが、5歳以降前頭葉が飛躍的に発達することを考慮すると、この時期の子どものほうが発達の個人差がみられやすいと解釈できる。

以上の一連の結果から、二言語同時獲得では二言語間で知識が共有され処理されることによる獲得への影響の存在、そして二言語の存在により一言語とは異なる認知的過程が存在する可能性が確認されたといえる。また、言語的な切り替え課題のパフォーマンスが実行機能系と関連し、脳活動でもそれが示される結果を得ることができたことから、言語を切り替える行動が認知そしてそれを支える神経的基盤と関連している可能性が示されたといえる。しかしながら、他者理解である心の理論は英語獲得との関連をみせたものの、言語切り替え課題などの実行機能系と直接的な関連があまり見られなかった。これは心の理論が純粋な実行機能系の働きのみによって支えられているものではないためと考えられ、より複合的な要因を変数として捉えなおす必要があるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計17件（うち査読付論文 12件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 久津木文, 田浦秀幸	4. 巻 22
2. 論文標題 幼児期の外国語学習が認知にもたらす影響: 日・英バイリンガル幼稚園の園児を対象にした予備的検討.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin: トークス	6. 最初と最後の頁 41-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 久津木文	4. 巻 8
2. 論文標題 子どもの外国語習得能力と発達	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 チャイルドヘルス	6. 最初と最後の頁 27-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hideyuki Taura	4. 巻 1/1
2. 論文標題 A Linguistic and Neuro-Linguistic Case Study Examining the Developmental Stages in the First 6 Years of EFL Learning in Japan	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 JALT Mind, Brain, and Education SIGThe MindBrainEd Journal	6. 最初と最後の頁 71-90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田浦秀幸	4. 巻 0
2. 論文標題 継承語教育へのtranslanguaging導入: 海外土曜校でのケーススタディー	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 立命館大学国際言語文化研究所	6. 最初と最後の頁 28-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kutsuki Aya	4. 巻 online
2. 論文標題 The combination of words in compound nouns by Spanish-Japanese bilingual children: Transfers in unambiguous structure	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 International Journal of Bilingualism	6. 最初と最後の頁 online
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.1177/1367006917728387	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久津木 文, 田中 佑実	4. 巻 21
2. 論文標題 小学生がもつ言語話者に対する期待-国際学校での調査-	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 T A L K S	6. 最初と最後の頁 95-103
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Aya KUTSUKI, Yumi, TANAKA	4. 巻 27
2. 論文標題 Factors Affecting Children's Judgment of Culturally Deviant Acts: Findings from an International School in Japan	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Journal of Intercutlral Education	6. 最初と最後の頁 179-189
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久津木文	4. 巻 30
2. 論文標題 言語や表象の柔軟性は心の理論や実行機能と関連するのか	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 発達科学	6. 最初と最後の頁 53-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yumi, TANAKA, Aya KUTSUKI	4. 巻 0
2. 論文標題 Motivation for learning English in the immersion environment of an international school in Japan	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Journal of Bilingual Education and Bilingualism	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Aya KUTSUKI	4. 巻 51
2. 論文標題 Is understanding of pretense related to inhibitory control?: difference between intention understanding and representational manipulation. International Journal of Psychology, 51, 389.	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 International Journal of Psychology	6. 最初と最後の頁 389
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久津木文	4. 巻 19
2. 論文標題 バイリンガルの語彙カテゴリーの発達	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 神戸松蔭女子学院大学研究紀要言語科学研究所篇	6. 最初と最後の頁 69-86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久津木文	4. 巻 18
2. 論文標題 英語で話すことはカッコイイのか? : 日本の幼児の国々に関する知識と外国語に対する態度	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin	6. 最初と最後の頁 45-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 久津本文	4. 巻 29
2. 論文標題 心の理論・実行機能の観点からみた認知的・言語的柔軟性課題の検討	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 発達研究	6. 最初と最後の頁 165-168
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kutsuki, A. and Tanaka, Y.	4. 巻 N/A
2. 論文標題 Factors Affecting Children's Judgment of Culturally Deviant Acts	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Journal of Intercultural Education	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/14675986.2016.1145025	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kutsuki, A.	4. 巻 0
2. 論文標題 A Japanese-German-English Trilingual Child's Word Acquisition Patterns Focusing on Category Differences in Comprehension and Production	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 The Proceeding of The IAOR International Conference on Language Learning	6. 最初と最後の頁 81-91
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田浦秀幸	4. 巻 27
2. 論文標題 大型fNIRS機(OMM-3000)と簡易fNIRS機(PocketNIRS)との 相関性研究	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 立命館言語文化研究	6. 最初と最後の頁 145-148
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田浦秀幸	4. 巻 27
2. 論文標題 大型fNIRS機(OMM-3000)と簡易fNIRS機(PocketNIRS)との 相関性研究	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 立命館言語文化研究	6. 最初と最後の頁 145-148
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計21件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 8件）

1. 発表者名 久津木文, 田浦秀幸
2. 発表標題 幼児期の英語学習が心の理論と実行機能にもたらす影響の検討
3. 学会等名 MHB (母語・継承語・バイリンガル教育) 2018年度研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Aya KUTSUKI
2. 発表標題 Do bilingual and monolingual vocabularies differ? : Comparison of Japanese monolingual and Japanese-English bilingual children
3. 学会等名 2018 Annual Conference of the Korean Psychological Association (Seoul, Korea) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 久津木文, 田中佑実
2. 発表標題 国際小学校における日本語学習と英語学習に対する動機付け
3. 学会等名 全国英語教育学会第44回京都研究大会
4. 発表年 2018年

1．発表者名 久津本文
2．発表標題 形式の類似性は獲得語彙に影響を及ぼすのか 日本語-英語バイリンガル幼児の語彙の分析 -
3．学会等名 第30回日本発達心理学会 (早稲田大学)
4．発表年 2018年

1．発表者名 田浦秀幸
2．発表標題 「日本でのバイリンガル・バイカルチャー教育と子育て &保護者・教育関係者対象 -」基調講演
3．学会等名 第一言語としてのバイリンガリズム研究会第17回研究会（招待講演）
4．発表年 2018年

1．発表者名 Hideyuki Taura
2．発表標題 L2 loss and re-acquisition: A neurolinguistics/linguistic case study
3．学会等名 Linguapax（国際学会）
4．発表年 2018年

1．発表者名 田浦秀幸
2．発表標題 日英通訳体験による脳賦活様態の変化：6年間の縦断研究
3．学会等名 日本認知科学学会第35回大会
4．発表年 2018年

1．発表者名 Hideyuki Taura
2．発表標題 An fNIRS study on language acquisition and attrition
3．学会等名 fNIRS 2018 TOKYO (国際学会)
4．発表年 2018年

1．発表者名 Hideyuki Taura
2．発表標題 Regression and progression of bilingual's languages --A neuro-linguistic enquiry
3．学会等名 Bilingualism Forum 2018 (国際学会)
4．発表年 2018年

1．発表者名 久津木 文
2．発表標題 言語的切り替えは実行機能系と関連するのか モノリンガル幼児を対象とした擬似的言語切り替え課題の有効性の検討
3．学会等名 日本心理学会第81回大会
4．発表年 2017年

1．発表者名 久津木 文
2．発表標題 忘れられる語に傾向はあるのか バイリンガル幼児の一時的喪失データから
3．学会等名 日本心理学会第29回大会
4．発表年 2018年

1．発表者名 KUTSUKI Aya
2．発表標題 Switching performance is related to daily behavior and prefrontal activation in young children : examination of a new switching task
3．学会等名 11th ISB (国際学会)
4．発表年 2017年

1．発表者名 久津木文
2．発表標題 外国語話者に対する幼児の期待と態度について 国際プレスクールとの比較
3．学会等名 異文化間教育学会第37回大会
4．発表年 2016年

1．発表者名 久津木文
2．発表標題 心の理論と関連する言語や表象の柔軟性について
3．学会等名 日本発達心理学会第27回大会
4．発表年 2016年

1．発表者名 Aya KUTSUKI
2．発表標題 Is understanding of pretense related to inhibitory control?: difference between intention understanding and representational manipulation
3．学会等名 The 31st International Congress of Psychology (国際学会)
4．発表年 2016年

1．発表者名 久津木文
2．発表標題 バイリンガルの子どもの語と心の発達
3．学会等名 第一言語としてのバイリンガルリズム研究会（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2016年

1．発表者名 久津木文
2．発表標題 心の理論と関連する言語や表象の柔軟性について
3．学会等名 日本発達心理学会
4．発表年 2016年

1．発表者名 田中佑美・久津木文
2．発表標題 国際学校における児童の日本語学習動機
3．学会等名 異文化間教育学会
4．発表年 2015年

1．発表者名 久津木文
2．発表標題 外国語・日本語話者に対して小学生がもつ期待について
3．学会等名 異文化間教育学会
4．発表年 2015年

1．発表者名 Kutsuki, Aya
2．発表標題 Japanese-German-English trilingual child's word acquisition
3．学会等名 IAOR International Conference (国際学会)
4．発表年 2016年

1．発表者名 久津木文・田浦秀幸
2．発表標題 幼児期の英語学習が心の理論と実行機能にもたらす影響の検討
3．学会等名 母語・継承語・バイリンガル教育
4．発表年 2018年

〔図書〕 計5件

1．著者名 久津木 文	4．発行年 2017年
2．出版社 ミネルヴァ	5．総ページ数 3
3．書名 バイリンガルの言語発達(岩立志津夫・小椋たみ子編著 改訂新版「よくわかる言語発達」)	

1．著者名 久津木 文	4．発行年 2017年
2．出版社 ミネルヴァ	5．総ページ数 11
3．書名 バイリンガルの子どもの言語発達(秦野悦子・高橋登 編著「シリーズ 新・臨床発達心理学 言語発達とその支援」)	

1. 著者名 久津木 文	4. 発行年 2017年
2. 出版社 ミネルヴァ	5. 総ページ数 2
3. 書名 第二言語獲得と臨界期(岩立志津夫・小椋たみ子編著 改訂新版「よくわかる言語発達」)	

1. 著者名 久津木文	4. 発行年 2016年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 188-199
3. 書名 「我慢」は悪いことばかりではない [神戸松蔭女子学院大学人間科学部心理学科(編)『暮らしの中のカウンセリング入門』)	

1. 著者名 Hideyuki Taura	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Oxford University Press	5. 総ページ数 391-402
3. 書名 Attrition Studies on Japanese Returnees In Kopke, B. & Schmid, M. (Eds.) The Oxford Handbook of Language Attrition.	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	田浦 秀幸 (Taura Hideyuki) (40313738)	立命館大学・言語教育情報研究科・教授 (34315)	